

Newsletter Vol.7

2006.5.15

グローバル ネットワーク
Global Network 21



大勢の参加で盛り上がりました出版記念（講評会+懇親会）

GN21 新刊書『下からのグローバリゼーション：もうひとつの地球村は可能だ』（新評論）

2006年3月5日（日） 於京都タワーホテル

GN21 から久しぶりに本が出た。出版記念をやるということになった。各方面から予想を上回る43名が集まり、にぎやかな集いになった。学者だけではなく、企業関係者、出版関係者、メディア関係者、日本ベトナム友好関係団体、ラオスで活躍する手織物専門家、大学院生など、まことに多様であった。料理もよかった。盛り上がった。

ハノイのベトナム国家大学人文社会科学大学に客員教授として赴任し、一時帰国中の片岡幸彦代表がまず挨拶をした。そのあ

と木村宏恒事務局長（名古屋大学）から、新著で展開した主な論点、今後GN21で取り組んでいく研究会やニューズレター、出版計画の説明があった。

新著では、これまで言われていた「下からのグローバリゼーション」を日本ではじめて本の形でまとめ、3つの構成要素（NPO、地域おこし、文化）を提起した。それに関連する議論の交通整理を行っていくことを当面のGN21の方向とした。これまで「下からのグローバリゼーション」はNGO/NPO中心で理解されてきたが、「地

域おこし」の中心性を前面に出した。その「地域おこし」は農村中心的なものにとどまらず、先進国の8割、途上国でも20年もしないうちに5割を超えるであろう都市における「地域おこし」を前面に出した。「ローカルなもの」の中心には文化があるという理解の下に、文化にも大きなページを割いた。

これからの活動としては、「下からのグローバリゼーション」の3つの構成要素を理論的に深めていく。第一に「上からのグロ

ーバリゼーション」の矛盾＝行き詰まりを理論化する作業、第二に地域おこしの新展開、とくに「地域開発の文化化」や、地域のNPO論、欧米の地域おこし(Sustainable Community)と、それらの国際展開の可能性を探る。第三に文学・思想研究者などを中心に、「文化」とは何か、「近代文明」とは何かを考えていく「内からのグローバリゼーション」の方向。この3つで、研究会と出版活動を展開する、というのが事務局長の議論であった。



小林誠氏 (立命館大学) 森栗茂一氏 (大阪外大) 古川哲史氏 (黒人研究会) 黒川美富子氏 (文理閣社長)

国際政治学と文化人類学からの講評

二人が新著の講評に立った。新進気鋭の国際政治学者小林誠氏(立命館大学国際関係学部)は、「上からのグローバリゼーション」と「下からのグローバリゼーション」を対抗関係として描くと、「上から」の好ましくない面と「下から」の好ましい面が強調され、「上から」の好ましい面と「下から」の好ましくない面が軽視されることになる。「上から」の好ましい面は、人権、地球環境、ネットワークなどに代表され、「下から」の好ましくない面は、NGO-GO シナジー(NPOと政府協働による相乗効果)と言っ

た場合に国家や企業に市民社会が取り込まれる危険性や、ローカルな価値を無批判に賞賛する危険性、文化を強調しすぎて復古主義に与する危険性などを指摘し、大胆な展望を出す姿勢を保ちながらも、もっと精緻な分析が必要であるとした。そうした点はわかってはいたのだが、今後意識的に、ではどうするのか、理論化していく必要があると自覚させられた。

次に都市の文化人類学と神戸市の町おこしで大活躍中の森栗茂一氏が立った(大阪外国語大学。Googleなどで名前を入れて

Homepage を見てください)。いい生活を求めて多くの人が都市に集まってきたが、いま都市はやっていけなくなりつつある、行政はもう対応できないと、氏は言う（財政的に。また高齢化などで）。地域経営、都市経営について、どうやって Coordinate（調整）していくのが問われている。それが今日の学問の新しい分野ではないかというのである。国際関係を勉強している学生が地域の現場に入って、世界のなかの小さなコミュニティについて考える。コーディネートできる学生を育てる。これからの大学は現場に入る教育プロジェクトをもつべき

だ。伝統文化は努力して（再構築して）伝統文化として残るのだ。「下からの」というのは簡単ではない。住民にはそんな力はない。コーディネーターがない。それが今の問題だ、というのが氏の提起であった。

それで阪神大震災のとき、多くのボランティアが駆けつけて日本の「ボランティア元年」と言われるようになったが、多くのボランティアを調整する役目の重要性を浮かび上がらせたことを思い出した。今後の地域おこしや大学教育および研究に対する貴重な提言であった。



大谷保男氏(日ベト友好協会) 深山嘉伸氏(和歌山ベトナム会) 西堀わか子氏(奈良女大) 池田知隆氏(毎日新聞社)

各界からのご提言

北野栄三氏は、ジャーナリストとして活躍したあと、毎日放送を経て現在は和歌山放送社長である。アメリカでの取材経験などを話された。1960年代当時アメリカ社会は、小さいことは良い事だという共通認識があり、CBSがベトナム報道に積極的に取り組み、また日本でもベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）など、知識人が活動していた。今世界中に大きいことは良い事だという風潮がはびこり、現状を批判出来るメディアや知識人がどこかへ行ってしまった。知識人はもっと批判的立場に立って活

躍してほしいと挨拶された。

立命館大学の総長代理として出席された高杉巴彦（同常務理事）も若いときを振り返り、「学生時代、東京で国内版のグローバル化を経験し、京都に就職して地方でもグローバルな議論をやっていることに新鮮な驚きを受けた」と、「知識人が行動していた時代」を懐古し、「学生が実践的に参加し、勉強していく方向を増やしてほしい。」「上から」に対する「下からのグローバル化」も実践的につくりあげる必要があるのではないかと提起された。

嶋務氏は、兼松豪商の職員として欧州、中東、東南アジアに滞在し、いまは羽衣国際大学で教鞭をとられている。「商売柄、独裁者にも近づいた。数の上でごく一部の人が圧倒的な民衆を押しえ込んでいる世界というのはどうなっているのか、下からのグローバル化議論で解明してほしい。」「パキスタンで、貧しい人の目線でビジネスを考えてくれと言われて深く印象に残った。(性善説、性悪説と言うのはあるが)性弱説を視点にしてほしい」と問題提起さ

れた。

その他、「地上にはもともと道はない。人が歩いて道ができる」という魯迅の言葉を紹介された宇野木洋氏(立命館大学)、アメリカの刑務所で社会の底辺の人たちに3年間教えた経験が今の活動の原点になっていると言われた古川哲史氏(黒人研究の会事務局長)、「一緒に行って現場でというのが大事になっている」と最後の結びをされた池田知隆氏(毎日新聞大阪本社論説委員)など、各方面からご提言があった。

主な祝辞・所感

- ・ 「ハノイではたいへんお世話になりました。私も早速『下からのグローバル化』を拝読し、勉強させていただいております。」(古田元夫 東京大学副総長)
- ・ 「御著、さすがに時代を鋭く見ていられると感心しました。学生に勧めております。」(勝俣誠 明治学院大学教授)
- ・ 「表紙を飾る『人類再生のグローバルネットワーク』『もう一つの地球村』などの言葉に、今を憂う優しさと思いやり、未来を拓く勇気と英知を感じます。しっかり読ませていただきます。お元気で、ますますのご活躍をお祈りします。」(田中義久 元岐阜県郡上八幡産業振興公社専務理事。現郡上市秘書広報課長)
- ・ 「長久手の町づくりの勉強会で、お薦めの参考書として利用させて頂いております。時代を反省する啓蒙の書として広く受け入れられますよう、お祈り申し上げます。」(渡辺聖司 元日商岩井職員。定年後は愛知県長久手町でまちおこしのボランティアグループ「ワークショップ・ジョイ」を主催。)
- ・ 「まちづくりの参考書として、仲間と使わせて頂いております。」(青木孝弘 山形県長井まちづくりNPOセンター事務局長、長井市観光協会専務理事)
- ・ 「孤立や分断ではなく、連帯と共生によって地球的課題を解決していくことにとって、本書の御刊行は大きな意義を有していると考えます。」(家正治 姫路獨協大学教授)
- ・ 「資本による、また軍事的グローバル化に対抗して、下からの市民、自治体、そして国の、民主主義的な連帯のグローバル化をどのように形成するのか、その攻めぎ合いのなかにあることを感じています。出版おめでとうございます。」(高橋進 龍谷大学政治学教授。)
- ・ 「いま上からのグローバル化が席卷している。対抗するのは『下からのグローバル化』を措いてはないだろう。それだけにグローカリズムの視点が大事で、この本はまさにグローカリズムを形に表した労作だ。」(木津川計 『上方芸能』編集長)

春秋季刊誌『グリオ』から学ぶもの：GN21の前史

北島義信

19

80年代後半期から世界は目まぐるしく大きく変化し始め、ソヴィエト連邦・東欧体制は崩壊に向かった。崩壊に向かったのは、南アフリカの悪名高い「アパルトヘイト」体制についても同様であった。戦後続いた「米ソ二大国時代」・「冷戦時代」（このような世界の捉え方には、イスラーム世界の認識の欠如がみられるが）がようやく終わり、多元的多局的で平和な新しい時代が始まるかにみえた。しかし、「湾岸戦争」の勃発は、その「期待」を打ち砕いた。このような時代背景の中で、『グリオ』は生まれた。

現代アフリカ文学を学んでいた私は、1980年代の後半に片岡幸彦先生からお誘いを受け、『アパルトヘイト—南アフリカの現実』（1987年）の執筆に加えていただいた。執筆にかかわって、南アフリカの文学やルポルタージュを読む中で、「南ア黑人一般」ではなく、生身の固有名詞をもった個々の人間がアパルトヘイトと闘う生きざまに深い感銘を受けた。

それは、私自身が学生時代にヒンディー文学を読んだ時の感銘と同じものであった。不幸なことに、日本ではアジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカの民衆が具体的に何と向かい合い、どのように生きているのかを示してくれる文学作品を恒常的に読むことは、困難であり、多数の人々の目にはとどかなかつた。21世紀に向けて、このような、いわゆる「第三世界」の文学の紹介を

通じてこそ、われわれに根深く残っている「オリエンタリズム」的思考を打破し、未来への展望を考えることができるのではないか、またそれを担える人材もかなり存在しており、第三世界の文学を中心とした雑誌の発刊も可能ではないか、という私の思いを片岡先生に申し上げたことがあった。それは、私のみの思いではなく、「第三世界」の研究者の中にも、同じ思いの人々はかなりいたのであろう。「現代世界と文化の会」（春秋季刊誌『グリオ』、代表・加藤周一氏／編集責任者・片岡幸彦氏、平凡社発行）が1991年に誕生したのは、そのような研究者の主体的連帯の反映である。

この雑誌は、西アフリカの職業的詩人兼音楽家を指す言葉である「グリオ」と名づけられた。西アフリカでは、グリオは危機の時代においては自己の命をかけて警鐘を鳴らす役割を担っている。この雑誌の役割について、編集責任者片岡幸彦氏は次のように述べている。「（この雑誌の役割は）人類の遺産を受け継ぎながらも、既成の秩序や価値観が大きく問い直されている現代という時代を厳しく受け止めて、できればそれを克服しうるような新しいパラダイムやオルタナティブの構築に有効な素材を地球規模で集めて、みなさんに提供する、そしてわれわれ自身も大いに自由に論じることにある」（『グリオ』創刊号編集後記、1991年4月）。この雑誌に参加した人達は、自ら現代のグリオになろうとする人達であった。

『グリオ』は、「第三世界」(「第三地域」)を中心に扱っていた。それはつまり、「支配される側、見られる側、客体化される側の社会」であり、そこで扱われる「課題は被支配者の内側への接近であり、見られる側から見ることであり、主体-客体関係の主体-主体関係への転換である」と加藤周一氏は、上記創刊号で述べている。『グリオ』は、「第三世界(第三地域)」の文学を紹介することを主要な目的としているが、その理由は加藤周一氏によれば、「それらの地域とその文化を、外からだけではなく内から知りたい、とわれわれが願うからである。

(中略)われわれはそこに人それぞれの顔を識別し、個別的な人間の喜びや悲しみに共感し、つまるところ主体としての人間を認めるだろう。(科学のように)対象化し、観察し、分析することを超えて、彼らとの主体-主体関係へ向かう道がそこに開けることをわれわれは期待する」からである。

われわれは「第三世界(第三地域)」の文学紹介・研究を主たる切り口として、21世紀に向かって、既成の秩序・価値観の問い直しと新しいパラダイムの提起を目指した。「現代世界と文化の会」は、当初50名の会員で出発し、最終的には113名にまで増加した。これらの会員の多くは、中東世界、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ世界を研究対象としており、シンポジウム等を通じて、学際的研究も大きく前進した。『グリオ』には毎号、吉田ルイ子氏を初め長倉洋海氏、大石芳野氏などの新進気鋭のフォトジャーナリストによる、「第三世界」の現場からのフォトレポートも掲載されていた。『グリオ』は1991年から1995年までの5年間に、10巻を発行してその使命を終えた。その主たる理由は、90年代以降進行し

てきた読書人口の急速な減少による、出版の「採算」問題であった。しかしながら、5年間の活動の中で築き上げられた研究者の連帯と課題の明確化は、その後も受け継がれることになった。

『グリオ』の活動の中で明確となった課題としてあげられるのは、「グローバリゼーションとは、いかなるものか」、「欧米近代の思想的・文化的問題点とはなにか」、「近代をどう把握すべきか」であった。1995年以降、旧『グリオ』の会員の間で、この課題を深めるための研究会活動が開始され、そこには新たな研究者の参加もみられた。この成果は『人類・開発・NGO』(新評論、1997年)、『地球村の行方』(新評論、1999年)、訳書『オリエンタリズムを超えて』(新評論、2001年)となって現れている。

『グリオ』がかかげたパラダイムの課題も、「GN21」では、「下からのグローバリゼーション」の事例としての「地域おこし・まちづくり」研究として進行している。

われわれの活動の中で、多岐にわたる多くの重要な課題が現れてきた。それらを「地球村」の現実化へと再統合して行くことが必要であり、そのためには、今一度、人々の現実の姿、とりわけグローバリゼーション支配の下で苦しめられつつも、それを打ち破らんとするエネルギーを「第三世界」の人々から学ぶことが必要である。近年のノーベル文学賞の受賞作家の主流が「第三世界」の作家、及び「先進国」における「第三世界的現実」の下にある作家、であることをみてもその力強さは明らかである。課題の総合化をはかるためにも、その近道である「第三世界の文学」を学び、紹介するという、『グリオ』の出発点の思想に再度立ち返ることが必要である。(四日市大教授)

「宗教観と世界観はどう関係しているのか」

(2005年11月12日(土曜日) 於関西セミナーハウス)

日

本は世界にもまれな「無宗教」社会である(実態は宗教に対して無関心)。墓参りをする人は68%と高い(宗教生活がないことはない)が、日常的に祈りのある生活をする人は高齢者を中心に国民の13%にすぎない(1998年。78年は17%。NHK放送文化研究所『現代日本人の意識行動』)。いまだに人口の4割台が毎週教会に行き、Born Again Christian派がブッシュ大統領再選の原動力となるアメリカとは対極的である。では宗教観を欠如させた知識人の世界観には、宗教的世界の中で生きる他の国の知識人と比べてどうい問題があるのか?あるいは問題はないのか。

江戸時代まで日本社会は神仏習合の宗教に満ちていた。300戸余りの村(自然村)のなかに、寺院、神社、祠、路傍の石仏・石塔などの宗教施設は100以上あった。明治政府は、天皇制国家の精神的基礎を樹立するために神道国教化政策を取り、神仏分離と廃仏毀釈を全国的に展開した。頂点に伊勢神宮を置き、各地に官・国幣社(神社)を認定して神職を神官(公務員)とし、末端の村に産土(うぶすな)社を置いて全国階級制をつくり、それ以外の神々や御霊信仰を邪教、迷信として大量廃棄したのである(仏教界とは国の宗教政策に協力する限りにおいて妥協)(安丸良夫『神々の明治維新』)。さらに明治憲法において、欧米先進国の政教分離制度に妥協して、(国家)神道

は儀礼体系であり宗教ではないと説明し、今日の「無宗教」の基礎をつくった(安満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』)。

戦後憲法は、報国の靖国神社=国家神道の反省から政教分離を厳密にした。今日日本人は、平家物語の書き出し「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」を古文で習って知っているが、それが仏教思想の精髓であるということは知らない。奈良東大寺の仏像は盧遮那仏であることは覚えさせられるが、それは仏教の中でどういう仏であり、仏陀や阿弥陀、大日如来、観音などどう関係するのか学ばない。また戦後の都市化は、寺院の檀家組織という共同体を形骸化させた。

第一報告、浄土真宗住職北島義信(四日市大学教授)が「日本仏教から見た宗教観なき世界観」で主張したことは、今の日本の宗教状況のなかで知識人に必要なことは、「智慧(うちに向かって知る)の道」としての仏教が一方にあり、他方に国家と結びついた宗教(鎮護・護国の仏教—神道。空海—本居宣長—明治国家に連なる)という2つの道があることを理解することであるという。日本の基層信仰には地域性の強い呪術的な共同体信仰があり、その共同体を重層的に統合した大和政権も呪術的な共同体的国家であり、社会底辺の神祭りの性格に規定されていた。それを仏教徒として融合させたのが空海で、仏教を国家宗教としたことによる。その反発が比叡山に結集し、

その一端から法然が生まれ、浄土宗、浄土真宗という庶民の救いが生まれる。近代国民国家形成においては、伝統的宗教は否定され、「心の中」でのみ存在を限定され、国家が「神的存在」「絶対的存在」（国家信仰・国家神道）となる。信仰を持つ必要は必ずしもないが、国家神道を批判（相対化して認識）する軸としての近代における宗教の理解は必要であるというものであった。

また、宗教観は教義と信心からなる。教義は読めばわかるが、信心はわかりにくい。親鸞は信心を体験（日常の言葉と行為）で説明したという興味ある説明もあった。宗教には思索的宗教と共同体的な宗教があり、歴史を動かすのは共同体的な宗教ではないかという重要な指摘も、参加者の高垣友海氏から出された。

第2報告は、両角英郎（羽衣国際大学・哲学）の「環境思想とキリスト教」であった。近年盛んな環境倫理学の論争として人間中心主義と自然中心主義の対立がある。1967年に発表されたリン・ホワイトの有名な論文「現代の生態学的危機の歴史的根源」は、その後の環境論議に火付け役を果たしたもののだが、環境危機の根源をユダヤ・キリスト教的な人間中心主義（その最たるものは旧約聖書の「人間＝神の像」・「地の支配」説）にあるとし、キリスト教を断罪するものであった。「被造物」というのは自然を神の作為によるものとして非神聖化した言葉である。被造物の中に神はいない（万物・自然をダルマ＝法・原理とする仏教、ヒンドゥー教との差）。ユダヤ教徒とキリスト教の一致点は、自然は神聖なものではないということである。ロックの「自由な所有権」（近代資本主義の礎石）の正当化は、自然の蔑視、自然の搾取と硬く結びついて

きた。自然は人間のためにつくられたものであるということ、自然破壊に抑制の効かなくなる力を人間に与えたということである。報告では、ホワイトらの批判にたいする今日のキリスト教の厳しい自己反省、自己検証、反論が紹介された。ローマや中世の国家と結びついた歴史的キリスト教を反省しつつ、キリスト教本来の姿を回復しようとしている。その成果が、Stewardshipの思想（神の代理人としての責任ある保護・管理者思想）や「共なる世界 Mitwelt」・「共なる被造物」としての自然との連帯思想、などである。こうして自然の固有性（固有の価値）を認め、自然の生存権を認めるという方向に、環境倫理学における自然中心主義と人間中心主義の対立を解くヒントがあるのでは、という観点が示唆された。

宗教はごく最近まで人間の世界観の基底を形成してきた。その精神構造と政治による作為の構造を理解することは、現代人の発想構造を理解する不可欠の営みではないかということをお教えされたのが、この研究会の成果であった。

（文責 木村宏恒）



いろひらてつろう
色平哲郎氏講演

「途上国を放浪して見えるようになった日本と、日本の農村医療に携わって
見えるようになった途上国：金持ちより心持ち—信州の地域医療の現場から—」

(2006年4月27日(木) 於名古屋大学大学院国際開発研究科)

色

平哲郎医師は噂どおりの快男児、「現代の赤ひげ」であった。東大中退、世界と日本を放浪、アジアの村で「会った人たちは金持ちではないが心の豊かな人たち(心持ち)」であることを認識した。その間「いろいろな人と付き合える」職を求めて医者になるべく、京大医学部を卒業した。

色平氏が佐久病院(長野県)に入るきっかけはバブさんとの出会いであった。バブさんはバングラデシュの仏教僧の家柄で、日本の医学部に留学し、その高度技術とPHCの欠如に失望し(バングラデシュの人々には無縁だから)、フィリピン大学医学部付属レイテ病院に行った。「PHC(Primary Health Care)とは、基礎医療とともに予防を重視する「包括医療」の意味である。

「途上国の劣悪な医療環境下では、医師資格など持っていない医学生や保健師、看護師たちも診療行為に携わる。」「PHCはPHN(Public Health Nurse保健婦)によって担われる。」「世界のほとんどの地域は無医地帯である。」佐久病院は農協立病院であり、農村医療や予防医学を重視する特異な病院で、JICA(日本国際協力機構)の途上国医療支援でも注目されている。レイテで色平氏はバブ氏に会い、佐久病院を教えられ、飛び込み、そのまま南佐久郡の山村(南

相木村)の診療所長になって現在に至っている。

「高齢化社会の村では、医療は見取りだ(高齢者の死につきあう)。」「ここには『おしん』の時代の村がある。日本の原像の話を知るのが魅力だ。」佐久市で働く非合法外国人労働者が医療を受けられないのを見て関係するようになり、毎年タイから「開発僧」を呼んで心のケアもするようになった(佐久地域国際連帯市民の会「アイザック」事務局長)。

参加者に国際開発研究科の院生が多かったこともあり、「日本を知るためには途上国(とくに山村)に行き昔の日本を見、途上国の人々の対日観を見て日本人とのギャップを考えてほしい。」「地球上の1/4=16億人には電気がない。データを越えて現場を知ってほしい。そして地球のメディカル・ドクターになってほしい」とメッセージがあった。日本がおかれた医療体制の現状についてもいろいろ話があったが、それについては、山岡淳一郎氏との共著『命に値段がつく日 所得格差医療』中公新書ラクレ(05年6月)に譲る。

色平哲郎氏のホームページは情報満載です。ぜひ見てください。

<http://www.hinocatv.ne.jp/~micc/Iro/top.htm>

(文責 木村)



ローバリゼーションは、今後もしばらくは GN21 の出版、研究活動の大きなテーマとなると思われますが、7月には「EUにおける地域おこし」、9月には「国際経済と国際政治の立場から見るグローバリゼーション」、そして秋には台湾より論客を迎えて、「オリエンタリズム」について迫る講演をそれぞれ予定しています。皆さまのふるってのご参加をお待ちし

ております。また、GN21 の前身である「現代世界と文化の会」が発行していた『グリオ』という文芸雑誌の果たした役割の大きさを思い起こしつつ、文学と社会、文学と文化といったテーマにもさらに力を入れて取り組む所存ですが、まずは「文化から見た現代中国」(6月)をテーマに研究発表を行う予定です。諸先生方のご出席とご協力をぜひともよろしくお願いいたします。

① 6月10日午後2時～5時半 (大学コンソーシアム京都會場)

宇野木洋 (立命館大学教授) 「同時代中国の文学事情——急激な市場経済化の下で悩み思考する文学者・知識人」

蔡明哲 (羽衣国際大学教授) 「中国進出日系企業の人材マネジメントに見る中国人の価値観」

② 7月15日 (土) 予定 テーマ：ヨーロッパの地域おこし

Luis Martino (羽衣国際大学教授) 「EUにおける国境を超えた地域間協力—EUにおける地域 (地方) の役割」 (仮題)

③ 9月30日—10月1日 (土日) 予定

シンポ「グローバリゼーションの争点と今後の展望：国際政治学者と国際経済学者の争点対話」

毛利良一、小林誠、木村宏恒など

④ 秋に予定 Tehsing Shan (台湾中央研究所) 「オリエンタリズムの今日」 (仮題)

編集後記

先日出版された『下からのグローバリゼーション』の書評が2006年5月6日付の図書新聞に掲載されました。ぜひご一読ください。ところで、先日、南紀の実家に帰った際、白浜の「南方熊楠記念館」に行っ

てまいりました。何度訪れても、彼の勤勉さとその豪才にはほんとに毎度毎度肝を抜かされます。私もやがて自分なりの曼荼羅が描けるように、熊楠にあやかってミクロからマクロへと一層の視野拡大をはかりたいものです。(伸)

グローバルネットワーク21 ニュースレター 第7号

発行年月日 2006年5月15日

編集・発行 グローバルネットワーク21 編集部

発行責任者 山本 伸 (やまもとしん)

Eメール gn21japan@yahoo.co.jp

Website <http://homepage2.nifty.com/gn21/>

TEL:0593-65-6599 / FAX:0593-65-6517

〒510-8512 四日市市萱生町1200

四日市大学環境情報学部 北島研究室気付